

広島・芸北の神楽

古代、文化や産業の中心として栄えた出雲地方の農耕儀礼や神事の神楽が、西の国・石見(いわみ)地方へ伝わりました。

この石見地方で、古事記や日本書紀などの神話や物語が取り入れられて、石見神楽独特の神楽文化へ成長しました。

ここに、全国に類を見ない神様だけが楽しむ神楽から、神楽を演じる者も見る者も楽しむ石見神楽が誕生したのです。

そして、この石見神楽は江戸時代(AD1603年-1867年)の終わり頃から広島県の芸北地方(げいほくちほう)へ伝えられました。明治時代(AD1868年-1912年)になると神職を中心に舞われていた神楽は、氏神社の氏子へ受け継がれることになり、次第に娯楽性の高い神楽が中心に舞われるようになりました。

戦後(AD1945年以降)になると日本の古典芸能の能や歌舞伎などの物語や日本各地の伝説を神楽化した演目も加わりました。

一方、神楽競演大会などが開かれるようになると、神楽をする人の心や技などが審査されることになり、演劇性や芸術性が問われる神楽へと進化しました。

さらに、これまで舞い継がれてきた演目を、それぞれの神楽団が独自に再構成して、「能や歌舞伎」とは一味違う舞台芸術に仕上げる傾向が見えてきました。

広島芸北の神楽は、農耕儀礼から古代日本(やまと)の国誕生の神話や物語、平安時代(AD794年-1185年頃)の伝説・歴史物語など総数70演目余りが伝えられ、今なお神楽団のオリジナル演目が増えられています。

芸北地域には100団体余りの神楽団が活動しています。神楽は、農山村を越えて若者文化となり、心身ともにたくましい次世代を育てはじめました。

古くて新しい日本の文化が築かれようとしています。なお、広島県には『安芸十二神祇(あきじゅうにじんぎ)』『比婆荒神神楽(ひばこうじんかぐら)』『備後神楽(びんごかぐら)』など源流の異なる神楽が併存しています。



公演後の様子

土蜘蛛(つちぐも)

今から千五百年前、日本の古代国家が統一される頃、今の奈良・大和盆地を中心に国家権力を奪う戦いは、激しいものでした。この戦いに敗れた者は、命からがら大和を一望する葛城山(かつらぎさん)の奥深く逃げて、息をひそめて暮らしたと言います。

彼らは、土蜘蛛と言われ、蔑(さげす)まれ暮らしていました。

あれから都は、大和から京都へ移り、数百年が過ぎた頃のことです。

神楽の物語は、「土蜘蛛が踏みにじられた歴史を晴らすと共に、自分の支配できる世の中にする為、平和を守る都の長官・源頼光(みなもとのかげみつ)へ戦いを挑む」というものです。

土蜘蛛は、鬼となって大和から京の都へ向かいます。ちょうどその時、頼光は病に伏していました。そして侍女(じじょ)・胡蝶(こちょう)を医者(い)の処へ薬を買に行かせていました。

それを知った土蜘蛛は、薬を持ち帰る胡蝶を殺し、薬と毒薬をすり替え頼光に飲まそうと企みます。

頼光は、その薬を飲みかけた時、異変に気づき、名刀で鬼・土蜘蛛の化身の胡蝶を切りつけます。しかし、鬼は傷を負ったまま、棲み家・葛城山へと逃げていきます。

そして頼光の家来は土蜘蛛を葛城山まで追い求め退治します。



土蜘蛛：大塚神楽団

滝夜叉姫：中川戸神楽団

滝夜叉姫(たきやしやひめ)

今から千年前。都は日本の西側にある京都でした。この頃を平安時代(AD794年-1185年頃)と言い、平和な時が流れていました。しかし、日本の東側の地方には力の強い武士団が生まれていました。その首領・平将門(たいらのまさかど)は、「東には東の国を造り自分が支配者になる。」と宣言します。

「新しい自分たちの国をつくる。」ということです。

これに驚いた当時の国家は、軍隊を送り将門とその一族を討伐します。

これは、日本の歴史に『天慶(てんげい)の乱』と記されています。

神楽の物語は、将門の娘・瀧姫(たきひめ)がこの戦争の中で一人生き残ったという伝説から創作されたものです。

瀧姫は、父・将門の仇討ちをする為、厳しい修行をして妖術を身に付けます。そして滝夜叉姫と名前を変え、手下を集めて戦争の準備をします。これを知った西の国は、姫の妖術に負けない力を持つ古い師と軍隊を東の国へ向かわせます。そして、激しい戦いの末、滝夜叉姫は討ち取られます。

制作 北広島コミュニティ・ツーリズム・エージェンツ協議会
監修：NPO法人広島神楽芸術研究所

神楽

KAGURA JAPAN

広島

HIROSHIMA

神楽物語

KAGURA STORY

日本の神楽

神楽は、自然の恵みに感謝する心から生まれた農耕儀礼です。

昔むかし私たちの先祖は、この世の出来事はすべて神々の営みであると信じていました。

そして、秋の収穫が終わると様々な食べ物を神聖な場所へ供えて、お祭りの形を整え、神さまに感謝する姿を神楽という儀式に仕上げました。

その後、中国から伝わった陰陽五行(いんようごぎょう)を説く陰陽道(おんみょうどう)が神楽へ取り入れられました。

陰陽道は東西南北の方位や春夏秋冬の四季が大自然の理(ことわり)として、人々の暮らしや農耕生活に深くかかわっていることを伝えました。

こうして、原始的で素朴な農耕儀礼の形の神楽へ太陽信仰の強い神事や儀式が加わるようになり、さらに国家安泰・無病息災などより広い願い事や祈りの行事へと発展しました。

また、一方では、安住の地を求める人々によって氏神さまを奉る氏神社(うじがみじんじや)が全国的に建てられていきました。

この動きは、神楽と共に全国的なものとなったのです。

神楽は各地の文化風土に支えられ、神職やその土地の人々によって受け継がれてきました。そして、伝統芸能・郷土芸能と言われる日本の民俗芸能として現在も民衆の中に息づいています。

なお、今から六百年前の室町時代(AD1336年-1573年)、この神楽から『能』が生まれ、五百年前の戦国時代(AD1467頃-1573頃)に『歌舞伎』が生まれて、世界的に知られる日本の古典芸能になったのです。



天の岩戸：原田神楽団



八岐大蛇：山王神楽団

八岐大蛇 (やまたのおろち)

この物語は、日本の神話です。昔むかし『出雲の国』に八人の娘と老夫婦が住んでいました。ある夏の事です。「一つの体に頭が八つ尾が八つ」蛇の形をした怪物が、大きな山から出てきて娘を一人飲み込みました。

そして、その後毎年その季節に現われて娘を一人ずつ飲み込むのでした。いよいよ八人目の娘が飲まれる時になり、娘と老夫婦は悲しんでいました。そこへ、空のかなたから神様が降りて来られました。神様は、老夫婦に酒を造らせ犠牲(いけにえ)になる娘の前に置かせました。怪物は、雷や大雨と一緒に現われ、酒に映った娘を、娘と思い飲み干して酔いつぶれます。勇気ある神様は、怪物を退治されます。そして助けた娘と結婚され、出雲の国で幸せに暮らされた、というお話です。

実は、この怪物は西日本に連なる山々、そしてこの山々から流れ出る洪水のことです。また娘は、希稲田姫(くしいなだひめ)と書きます。希とは、めずらしいという意味があり「めずらしく豊かに実った稲の田の姫」という意味です。『八岐大蛇』の物語は、田畑を洪水から守り、米づくりの国・日本が生まれたことを伝えています。



八岐大蛇：山王神楽団



紅葉狩：上河内神楽団

紅葉狩 (もみじがり)

この神楽の物語は、高い山々が日本の屋根を想わせる信州の戸隠山(とがくしやま)の伝説と、日本の美しい秋の情景が結ばれて創られたものです。

今から千年の昔、戸隠山に鬼が棲み、近くの村々で略奪(りやくだつ)を繰り返していました。

鬼の悪事は都へ伝えられました。そこで国の平和を守る将軍・平維茂(たいらのこれもち)は、都から戸隠山へ鬼退治に向かいました。維茂が戸隠山を登ると、秋の陽が照りはえて山々から見渡す紅葉は、真っ赤な海のように輝き、別世界へ迷い込んだように感動したのです。

そこへ、美しい姫が現われて、この紅葉の樹の下で宴に誘いました。

実は、この姫は鬼の化身だったのでした。維茂は、すでに将軍であることを忘れ、姫が鬼の化身であることも知らず、お酒をすすめられるままに飲んで酔いつぶれてしまいました。

姫は、鬼となり、維茂を引き裂いて食べようとしています。その時、いつも維茂が大事に祈っている神さまが現われます。神さまは維茂を目覚めさせ、正義の神の剣を授け、鬼を退治します。

玉藻前・悪狐伝・殺生石

今から千五百年前。『悪』の限りを尽くし、世の中を乱して、日本へ飛来した狐がいました。

この狐は、金毛九尾(きんもうきゅうび)の狐と言われ、全身金色に輝く美しい毛で覆われていました。そして尻尾が九つあったのです。

神楽の物語は、三話に分かれています。



悪狐伝：宮乃木神楽団

第一話は『玉藻前(たまものまえ)』と言います。

日本に渡ってきたこの狐は、絶世の美女に化けます。そして玉藻前(たまものまえ)の名前で時の『帝(みかど)』の寵愛を受けるようになります。すると、帝は体調を崩され、国の政治も乱れるようになったのです。これを不審に思った陰陽師の安倍泰成(あべのやすなり)は、この美しい姫が狐の化身であることを見破ります。姫は、狐に戻ると東の空へと飛び去っていきます。

第二話は、『悪狐伝(あくこでん)』と言います。

玉藻前は、陰陽師に正体を見破られると、都から東の空へ飛び去ります。そして、都から遠い東の国の那須野ヶ原(なすのがはら)へ舞い降ります。再び美しい姫に化けて、那須野ヶ原の村人を油断させ次々と殺していきました。この悪い狐の事を知った東の国の平和を守る三浦之介(みうらのすけ)と上総之介(かずさのすけ)という弓の名人は、ついにこの狐を弓で射殺してしまいます。

第三話は、『殺生石(せつしょうせき)』です。

弓で射殺された狐の精魂は、那須野ヶ原で石になります。これを殺生石と呼ぶようになります。この殺生石は、この石に近づく人や動物を原因不明のまま殺す恐ろしい石になったのです。

そして今度は、偉いお坊さんが念仏を唱えながら近づき、持っていた大きな金槌でその石を叩き割りました。

狐の精魂は、くだけて那須野ヶ原は平和になりました。

神楽は、この三つの物語が独立した演目として舞われています。

また、この物語の創られた那須野ヶ原は、火山のあった所で現在も硫黄(いおう)の臭いが漂っています。そして殺生石の碑が建っています。また、殺生石を叩き割ったお坊さんの名前を玄翁(げんのう)和尚と言ひ、あれから石を割る金槌を玄翁と呼ぶようになったと言います。

戻り橋・羅生門・大江山の背景

今から千二百年前。都は奈良から京都に移りました。平和で豊かな国になることを願って平安時代(AD794年-1185年頃)と名づけられました。

都の玄関には、豪華な『羅生門』という門が建てられ、都の建物は美しく並んでいました。時は流れ、平安時代が二百年を過ぎる頃になると、世の中は乱れ、盗賊や人さらいなどが多くなっていました。都の南側・表玄関に建つ『羅生門』は崩れていました。

また、都の北側に掛かる『戻り橋』から、夜になると鬼が来る。と言われるようになりました。

神楽の物語は、世の中を乱す『鬼たち』と、都の平和を守る『人たち』の戦いを創作したものです。鬼の首領は酒呑童子(しゅてんどうじ)です。手下には、茨木童子(いばらぎどうじ)・唐熊童子(からくまどうじ)がいます。

都を守る武将は、源頼光(みなもとのらいこう)です。この頼光には勇敢な四人の従者がいます。これを四天王(してんのう)と言います。

この物語は、『戻り橋』『羅生門』『大江山』と続き、それぞれ独立した演目として演じられています。

『戻り橋』は、片腕を落とされた鬼の物語。

『羅生門』は、鬼の首領によって片腕は取り返され、鬼の腕は元通りになった物語。

『大江山』は、頼光と四天王が、大江山の鬼を退治する物語です。



戻り橋：山王神楽団



羅生門：大塚神楽団

戻り橋 (もどりばし)

「夕方になると『戻り橋』近くに鬼が出る。そして、都の人を襲っている。」と四天王

の一人・渡辺綱(わたなべのつな)は聞きました。綱は鬼を退治するため戻り橋に向かいます。すると空を飛んだり女性に化けることが出来る『妖術(ようじゆつ)』を使う鬼に出会います。

綱と鬼は、戦いになり、綱は鬼の片腕を切り落とします。鬼は空高く舞い上がり、北の山へ向かって逃げ去ります。

これが『戻り橋』の物語です。

羅生門 (らしょうもん)

世の中が乱れてくると、美しく輝いていた羅生門も崩れ、ここへ死人が投げ込まれたり、鬼が棲んでいると言われるようになりました。

この羅生門の近くに綱の館がありました。綱は、戻り橋で切り落とした鬼の片腕をこの館に隠していました。

そこへ、綱の幼い頃の乳母が現われ、鬼の腕を見たいと言います。綱は見せることが出来ないと言いますが、とうとう見せてしまいます。

この乳母は、綱の本当の乳母を食い殺して、乳母に化けた酒呑童子だったのでした。

乳母は、鬼の片腕をつかむと片腕のない鬼のところへと逃げ去り、腕を付けてやります。

これが『羅生門』の物語です。

大江山 (おおえやま)

都は、鬼の暗躍する『恐怖の都』となりました。源頼光は、占い師に『鬼の棲み家』を尋ねました。占い師は、『都から遠く北の方向にある大江山である』と答えました。

頼光と四天王は、大江山へ鬼退治に向かいます。途中、神さまが現われ神さまは、頼光へお酒を贈りました。この酒は、鬼が飲めば毒になり、人が飲めば元気になるというものでした。

大江山に差しかかると、涙を流しながら布を洗う姫に出会いました。都からさらわれて来た姫だったのでした。この姫の案内で鬼の館へ入ります。酒呑童子は、この一行が何者か疑います。頼光は、日本の山々を修行して歩く山伏と説明して、神さまから授かったお酒を贈ります。

酒宴の後、頼光たちは、酔った鬼たちと激闘して退治します。そして都へ凱旋します。

これが『大江山』の物語です。



大江山：原田神楽団

Kagura in the Geihoku area of Hiroshima Prefecture

In ancient times, Izumo prospered as a cultural and industrial center. Izumo Kagura, performed as an agricultural and Shinto ritual, was introduced to its western neighbor, Iwami.

In Iwami, Kagura added myths and stories of Kojiki (the Record of Ancient Matters) and Nihonshoki (the Chronicle of Japan) and developed its own unique style. Kagura was originally meant to entertain the gods, but Iwami Kagura was unique because performers and spectators also enjoyed it.

Iwami Kagura spread to the Geihoku area in the north of Hiroshima Prefecture at the end of the Edo period (1603-1867). Kagura was mainly performed by Shinto priests, but in the Meiji era (1868-1912), shrine parishioners came to perform Kagura. With this, more entertaining repertoires became the mainstream of Kagura.

After the end of World War II in 1945, Kagura added various stories from the classical Japanese arts of Noh and Kabuki. It also added to the repertoire from the legends from different parts of Japan.

When Kagura contests were inaugurated to judge the performers' spirits and skills, Kagura developed its dramatic and artistic aspects, which were evaluated at these events.

At the same time, there was a tendency for Kagura groups in different communities to develop their own unique features by modifying traditional Kagura into a theatrical performing art different from Noh or Kabuki.

Kagura in the Geihoku area of Hiroshima Prefecture now has a repertoire of more than 70 performances: including agricultural rituals; myths and stories of the nation-building of ancient Japan (Yamato); legends and historical stories of the Heian period (794-c.1185); and original stories that are still being added by different Kagura groups.

There are more than 100 Kagura groups in the Geihoku area. Kagura is now a popular youth culture, transcending the old boundaries of farming and mountain villages, and contributing to the healthy mental and physical growth of new generations. In this way, a new, but traditional, Japanese culture is being developed in the form of Kagura.

In Hiroshima Prefecture, there are also other lines of Kagura with different roots, including Aki Juni Jingi, Hiba Kojin Kagura and Bingo Kagura.



After the performance

Tsuchigumo

About 1500 years ago, before ancient Japan was unified, there were fierce battles around today's Yamato Basin in Nara over the control of the state. The people who lost the battles fled for their lives and hid themselves deep in the mountain of Katsuragi, which overlooked Yamato.

They were despised and called Tsuchigumo (Earth Spiders).

As time passed, the capital was relocated from Yamato to Kyoto, and again some hundred years passed.

This story of Kagura is about a Tsuchigumo challenging Minamoto no Raiko, the head of the samurais who protected the capital. The Tsuchigumo attempted to avenge the long history of humiliation and to seize power.

The Tsuchigumo turned himself into a demon and went from Yamato to Kyoto. At that time, Raiko was ill in bed and sent his maid, Kocho, to a doctor for some medicine.

The Tsuchigumo knew this and killed Kocho, who was on her way back, carrying the medicine. He changed the medicine for poison and attempted to make Raiko take it.

Just as Raiko was about to take it, he sensed that something was wrong, and with a famous sword, he slashed at the Tsuchigumo now disguised as Kocho. The wounded demon fled back to his home in Mount Katsuragi.

Raiko's retainers chased him to Mount Katsuragi and defeated him.



Tsuchigumo (Otsuka Kagura Group) Takiyasha-hime (Nakakawado Kagura Group)

Takiyasha-hime

About one thousand years ago, Kyoto, in western Japan, was the national capital. At that time of the Heian period (794-c.1185), Japan enjoyed peace, but in eastern Japan, a powerful samurai clan was forming. The head of the clan, Taira no Masakado, declared that he would control the eastern part of Japan by establishing a new country of his own.

At this unexpected news, the government sent an army to destroy Masakado and his clan.

This was called the Tengyo Revolt.

From this piece of history, a Kagura story was created based on the legend that Taki-hime, a daughter of Masakado, survived as the sole survivor of the clan.

In order to take revenge for her father, Taki-hime went through rigorous training to acquire supernatural powers. She changed her name to Takiyasha-hime and gathered soldiers to wage a war. The capital in the west knew this and sent an army and a powerful Yin-Yang master, who would not yield to her evil powers.

After a fierce battle, they defeated Takiyasha-hime.

Produced by:

The Kitahiroshima Community Tourism Agent Association
Edited by NPO Hiroshima Kagura Art Laboratory

神楽

KAGURA JAPAN

広島

HIROSHIMA

神楽物語

KAGURA STORY

Kagura in Japan

"Kagura" is a traditional agricultural ritual that was born to offer thanks for the blessings of nature.

In the old days, our ancestors believed that everything in this world was a divine act. After the autumn harvest, people offered various kinds of food to sacred places and held festivals, from which a ritual called Kagura was born to show the people's gratitude to the gods.

Later, Kagura added elements of "Onmyodo," which taught the Chinese theory of Yin-Yang and the Five Elements. According to Onmyodo, the four cardinal points—north, south, east and west—and the four seasons—spring, summer, autumn and winter—were, through the laws of nature, closely related to people's daily lives.

In this way, and by incorporating Shinto rites and ceremonies, strongly characterized by sun worship, Kagura developed from a primitive and simple agricultural ritual into a ritual to pray for a wider range of things including the peace and security of the nation, and the health and wellbeing of the people.

Meanwhile, tutelary shrines were built across the country by people who desired to live in peace. With the spread of tutelary shrines, Kagura was propagated to various places around Japan.

Kagura has been fostered in the cultural climate of each community and passed down from generation to generation by Shinto priests and local people. It is still actively practiced by people in local communities as a form of Japanese folklore performing art, called "traditional performing art" or "local performing art."

Noh developed from Kagura about 600 years ago in the Muromachi period (1336-1573), and Kabuki also emerged about 500 years ago during the Civil War period (c.1467-c.1573). They have become well-known to the world as classical Japanese performing arts.



Amata no Iwato (Harada Kagura Group)



Yamata no Orochi (Sanno Kagura Group)

Yamata no Orochi

This story was taken from a Japanese myth.

Once upon a time, in the Province of Izumo, there was an old couple who had eight daughters. One summer's day, a monstrous serpent with eight heads and eight tails came from the big mountains and swallowed one of their daughters.

Every year, in the same season, the serpent appeared and swallowed one of their daughters. Finally there was only one daughter left, and now she was to be sacrificed. The old couple and their daughter were lamenting their fate.

Then a god descended from the high heavens. The god told the old couple to prepare some "sake" (rice wine) and put it in front of the daughter who was to be sacrificed. The monster appeared with a thunder storm and drank all the sake, thinking that the daughter's image reflecting on the sake was the daughter herself. The monster soon drank itself senseless. The courageous god attacked the monster and married the daughter he saved, and they lived happily ever after in Izumo.

Actually the monster is a metaphor of the mountain ranges of western Japan and the floods from these mountains. The daughter's name is Kushinada-hime. "Kushi" means "rare," "inada" means "rice fields" and "hime" is a suffix for a girl. Therefore her name means "rice fields blessed with a rare bumper crop." Therefore Yamata no Orochi (Eight-forked Serpent) tells the story of how Japan as a rice-producing country was born by protecting farmland from floods.



Yamata no Orochi
(Sanno Kagura Group)



Momijigari
(Uegochi Kagura Group)

Momijigari (Maple Viewing)

This story of Kagura was created from a legend about Mount Togakushi in Shinshu Province, where the high ranges of mountains are likened to the roof of Japan, in a beautiful Japanese autumn setting.

About one thousand years ago, the demons that lived in Mount Togakushi frequently attacked the nearby villages and looted them.

The villainy of the demons was reported to the capital, and General Taira no Koremochi, who protected the security of the country, headed from the capital to Mount Togakushi to attack the demons.

When Koremochi went into the mountain, he was deeply moved by the beautiful maple trees shining like a crimson sea reflecting the autumn sun and felt as if he had wandered into another world.

There he saw a beautiful woman, who invited him to a party under the maple trees. The woman was actually a demon in disguise.

Koremochi forgot his role as General and, without knowing that the woman was a demon, he drank sake, which she continued to ply him with until he passed out.

The demon revealed its true identity and was about to tear Koremochi apart and eat him. Then, a god that Koremochi always worshipped appeared and woke him up. With the Sword of Justice, which the god gave him, Koremochi defeated the demons.

Tamamo-no-mae, Akkoden and Sesshoseki

About 1500 years ago, there was a fox that came to Japan after it had perpetrated all kinds of evils in different countries.

The fox was called the Fox with Nine Golden Tails. It had beautiful golden fur that covered its body, and it had nine tails.

There is a trilogy of Kagura about this fox.



Akkoden (Miyanoki Kagura Group)

The first story: Tamamo-no-mae

When the fox came to Japan, it disguised itself as a rare beauty called "Tamamo-no-mae" and was loved by the emperor. The emperor became ill, and politics stagnated.

Abe no Yasunari, a master of Yin and Yang, was suspicious about this situation and found out that the beautiful woman was actually a fox in disguise. The fox revealed its true nature and flew away in the sky toward the east.

The second story: Akkoden

After the master of Yin and Yang revealed that Tamamo-no-mae was actually a fox in disguise, the fox flew to the east and landed in a village called Nasunogahara, far away from the capital. The fox disguised itself as a beautiful woman again, then put the villagers off their guard and killed them one by one. Miura-no-suke and Kazusa-no-suke were protecting the security of eastern Japan. They were master archers and finally shot and killed the fox.

The third story: Sesshoseki

The spirit of the fox that was killed by the archers became a stone in Nasunogahara. This was a hideous stone called Sesshoseki (The Killing Stone). The people and animals that came near the stone died without ever knowing why.

In time a noble priest approached the stone, chanting a prayer to Buddha, and smashed the stone to pieces with a big hammer.

The spirit of the fox was shattered, and peace was restored to Nasunogahara.

Each story of the trilogy is a separate Kagura performance.

Nasunogahara, where these stories take place, was near a volcano and still smells sulfurous. A monument to Sesshoseki stands there today. Genno was the name of the priest who smashed the stone to pieces. People say this is why hammers for cracking stones are now called "genno."

Background of the trilogy, Modoribashi, Rashomon and Oeyama

About 1200 years ago, as the capital was moved from Nara to Kyoto, the Heian period (794-c.1185) started. "Heian" meant peace, reflecting the people's wishes for a peaceful and affluent country.

A gorgeous gate called Rashomon was built at the southern entrance of the capital, and beautiful buildings lined the boulevards of the city.

Time passed, and after about 200 years, the country lost its order and was filled with thieves and kidnappers. Rashomon, the gate that used to stand at the main entrance to the city had collapsed. Modoribashi was a bridge at the northern border of the capital. It was said that demons appeared there at night.

Kagura has created stories about how people protected the peace of the capital, fighting against the demons that threatened the peace.

Shutendoji is the chief of the demons, and Ibaragi-doji and Karakuma-doji are his retainers.

Minamoto no Raiko is a samurai who maintains the security of the capital. Raiko is accompanied by four brave retainers called Shitenno (Four Divine Guardians).

Modoribashi, Rashomon and Oeyama are a series of stories about Raiko, each performed separately in Kagura.

Modoribashi is a story of a demon that loses an arm.

In Rashomon, the arm is taken back by the chief demon, and the demon that had lost its arm had two arms again.

Oeyama is a story about Raiko and the Shitenno guardians, who defeat the demons in the Oeyama mountain range.



Modoribashi (Sanno Kagura Ggroup)



Rashomon (Otsuka Kagura Group)

Modoribashi

Watanabe no Tsuna, one of the four Shitenno guardians, was told that demons appeared near the Modoribashi bridge, as dusk fell, and assaulted the people in the capital. Tsuna went to the bridge to attack the demons. He encountered a demon that could use supernatural powers to fly and disguise itself as a woman.

Tsuna fought against the demon and cut off one of its arms. The demon flew high in the sky and sped away toward the mountains in the north.

This is the story of Modoribashi.

Rashomon

As the country became unsettled, the gate of Rashomon, which was once beautiful and shining, fell apart. Dead people were left there. People said that demons haunted this desolate place.

Tsuna lived near Rashomon. Tsuna had hidden the demon's arm in his house after cutting it off at Modoribashi.

A woman, Tsuna's nanny when he was a child, appeared and asked him to show her the demon's arm. At first, Tsuna refused, but as the woman insisted, he finally showed her the arm.

The nanny was actually Shutendoji in disguise. It had killed and eaten Tsuna's real nanny.

The disguised demon chief grabbed the demon's arm and ran away to the demon that had lost its arm. The arm was now attached to the demon again.

This is the story of Rashomon.

Oeyama

The capital had become a "city of terror," where demons proliferated. Minamoto no Raiko asked a seer where the demons dwelled. The seer said, "In the Oeyama mountain range, far to the north of the capital."

Raiko and the Shitenno guardians went to Oeyama to attack the demons. On the way, a god appeared and gave sacred sake (rice wine) to Raiko. The god said that the sake was good for humans but poison for demons.

When they came to Oeyama, they met a weeping girl who was doing some laundry. She had been kidnapped from the capital. The girl showed them to the demon's dwelling. Shutendoji was suspicious of his visitors. Raiko said that they were traveling monks training in various mountains around Japan, and he gave the sacred sake to Shutendoji.

After a feast and the sake, Raiko fought with the drunken demons and defeated them. They returned to the capital in triumph.

This is the story of Oeyama.



Oeyama (Harada Kagura Group)

히로시마 · 게이호쿠 (藝北) 의 가구라

고대시대, 문화 산업의 중심지로서 번영한 이즈모 (出雲) 지방의 농경의례나 신사 (神事) 인 가구라가 서쪽 나라, 이와미 (石見) 지방으로 전해졌습니다.

이 이와미지방에서 『고지키 (古事記)』 『일본서기 (日本書紀)』를 비롯한 신화와 옛 이야기들을 연목에 받아들인 이와미 (石見) 가구라는 독특한 가구라 문화의 발전을 이룩하였습니다. 여기에 바로 신들만이 즐기는 가구라에서 가구라를 연기하는 사람들이나 그를 구경하는 사람들까지 모두가 즐기는 일본 전국에서 유례를 찾지 못하는 이와미 가구라가 탄생한 것입니다.

이 이와미 가구라가 에도시대 (江戸時代 1603-1867년) 말기, 히로시마현 게이호쿠 (藝北) 지방으로 전해졌습니다.

메이지시대 (明治時代 1868-1912년) 가 되면서 신직들이 중심이 되어 춤춘 가구라는 우지가미 (氏神) 신사를 받드는 그 고장 사람들에게 전수되어 점차 오락성이 높은 가구라가 중심이 되어 갔습니다.

전후 (1945년 이후) 에는 일본의 고전예능인 「노」 및 「가부키」 등에서 다루는 이야기를 비롯하여, 일본 각지의 전설을 가구라화한 연목도 추가되어 갔습니다.

한편, 가구라 경연대회 등이 열리게 되자, 가구라를 연기하는 사람들의 마음과 기술도 점차 대상이 되고, 연극성이나 예술성까지 추구하는 가구라로 진화되어 갔습니다. 또한 오늘날까지 전수되어온 연목을 각 가구라단 (神樂團) 이 독자적으로 재구성하여, 「노」 나 「가구라」 와도 색다른 무대예술로 창작하는 경향이 보이기 시작하였습니다.

히로시마 게이호쿠 가구라는 농경의례로부터 고대 일본, 「야마토 (大和)」 나라 탄생에 관한 신화와 이야기, 헤이안시대 (平安時代 794-1185년경) 의 전설, 역사에 얽힌 이야기 등 총수 70 남짓한 연목을 전수하고 있으며, 현재도 계속 가구라단의 오리지널 연목이 보태지고 있습니다.

게이호쿠 지역에는 현재 100단체를 넘는 가구라단이 활동하고 있습니다.

가구라는 산간지 농촌 마을을 초월하여 젊은이 문화로 성장을 거듭하고 있으며, 몸과 마음도 튼튼한 차세대를 키우기 시작하였습니다. 새롭고 오래된 일본의 문화가 바야흐로 구축되려고 하고 있습니다.

히로시마현에는 『아키 12 신기 (安藝十二神祇)』 『히바 고진 (比婆荒神) 가구라』 『빈고 (備後) 가구라』 등 원류를 달리 하는 가구라가 병존 (併存) 하고 있습니다.



공연 후의 모습

쓰치구모 (土蜘蛛, 땅거미)

지금으로부터 1500년 전, 일본의 고대국가가 통일된 무렵에 현재의 나라 (奈良) 인 야마토 (大和) 분지를 중심으로 국가권력을 정탈하는 전투는 격렬한 것이었습니다. 이 전투에 패한 자는 간신히 야마토 분지가 한 눈에 바라보이는 가쓰라기산 (葛城山) 의 깊은 산 속으로 달아나, 숨을 죽이고 살았다고 합니다. 그들은 땅거미라 불리우면서 업신여김을 당하면서 살았습니다. 그 후 수도는 야마토에서 교토 (京都) 로 천도되고, 수 백년이 지난 어느날의 일입니다.

가구라의 이야기는 「땅거미가 짓밟힌 역사의 울분을 풀고 자기들이 지배하는 세상으로 바꾸기 위해 평화를 지키는 수도의 장관, 미나모토노 라이코 (源賴光) 에게 싸움을 건다.」 는 내용입니다.

땅거미는 귀신이 되어 야마토에서 교토를 향합니다. 마침 그때 라이코는 병상에 누워 있었습니다. 시녀 (侍女) 인 고초 (胡蝶) 를 의사에게 보내 약을 구해 오도록 한 것을 알아낸 땅거미는, 약을 사서 돌아오는 고초를 죽이고, 그 약을 독약과 바꾸어 라이코에게 먹이고자 획책합니다. 라이코는 그 약을 먹던 도중에 이변을 알아차리고 명검으로 귀신, 땅거미 화신인 고초를 뺏니다. 하지만 귀신은 상처를 입은채, 소굴인 가쓰라기산으로 달아납니다. 그러자 라이코의 가신들이 가쓰라기산까지 땅거미를 쫓아가, 퇴치하고 맙니다.



쓰치구모(Otsuka Kagura Group)



다키야사히메 (Nakakawado Kagura Group)

다키야사히메 (滝夜叉姫)

지금으로부터 천 년 전, 수도는 일본의 서쪽에 위치한 교토 (京都) 였습니다. 이 시기를 헤이안시대 (平安時代 794-1185년경) 라고 하며, 말 그대로 평화로운 시간이 흐르고 있었습니다. 한편 일본의 동쪽 지방에서는 막강한 무사단이 나타나고 있었습니다. 그 수령인 다이라노 마사카도 (平將門) 는 「동쪽에는 동쪽 나라를 세워, 내가 그 지배자로 되겠다.」 고 선언합니다. 새로운 자기들의 나라를 만든다는 것입니다. 이에 놀란 당시의 국가는 군대를 보내어, 마사카도와 그 일족을 토벌합니다.

이는 일본 역사에 『덴교노 란 (天慶之亂)』으로서 기재되고 있습니다.

제작 기타히로시마 커뮤니티·투어리즘·에이전트 협의회
강수 : NPO 히로시마 가구라 예술 연구소

가구라

KAGURA JAPAN

히로시마 HIROSHIMA

가구라 이야기 KAGURA STORY

일본의 가구라 (神樂)

가구라는 자연의 혜택에 감사하는 마음으로부터 발생한 농경 의례입니다.

먼 옛날 우리 조상들은 이 세상의 모든 일들은 신들의 영위라고 믿었습니다. 가을 수확을 거두면 다양한 음식물을 신성한 장소에 올려 제전 (祭典) 의 형태를 갖추어 신에게 감사하는 행위를 가구라 (神樂) 라는 의식으로 만들었습니다.

그 후 중국에서 전해진 음양오행 (陰陽五行) 을 강설하는 음양도 (陰陽道)가 가구라에 도입되었습니다. 음양도는 동서남북 방위와 춘하추동 사철이 대자연의 이치로써 사람들의 일상 생활이나 농경 생활에 깊이 관여되고 있음을 사람들에게 전했습니다. 그리하여 원시적이며 소박한 농경 의례 형태의 가구라에 태양 신앙이 강한 신사 (神事 신을 위한 제사) 또는 의식이 더해지면서, 나아가서는 국가안태 (國家安泰), 무병식재 (無病息災) 등 보다 광범위한 소원이나 기원의 행사로 발전해 갔습니다.

한편으로는 안주의 땅을 찾는 사람들에 의하여 그 고장 수호신을 모시는 우지가미 (氏神) 신사가 일본 전국에 지어지기 시작하였습니다. 이는 가구라와 더불어 전국적인 움직임으로 퍼져 갔습니다.

가구라는 각지의 문화풍토에 힘입어 신직 (神職) 이나 그곳 사람들에 의해 전수되어 왔습니다. 그리하여 전통예능·향토예능이라 일컬어지는 일본의 민속예능으로서 현재도 민중 속에서 살아 숨쉬고 있습니다.

지금으로부터 약 600년 전인 무로마치시대 (室町時代 1336 - 1573년) 에는 이 가구라에서 「노 (能)」 가 태어났고, 500년 전인 전국시대 (戰國時代 1467 - 1573년경) 에는 「가부키 (歌舞伎)」 가 태어나 세계적으로 이름난 일본의 고전예능으로 성장하였습니다.



아마노 이와토 (Harada Kagura Group)



아마타노 오로치 (Sanno Kagura Group)

야마타노 오로치 (八岐大蛇)

이 이야기는 일본의 신화입니다.

먼 옛날 『이즈모 (出雲)』란 나라에 노부부와 8명의 딸이 살고 있었습니다.

어느 여름 날이었습니다. 「하나의 몸에 8개 머리와 8개의 꼬리」를 가진 뱀 형상의 괴물이 큰 산에서 나타나, 딸 한 명을 먹어 삼켜 버렸습니다. 그 후 매해 그 계절에 나타나서는 딸을 한 명 씩 삼켜 버리는 것이었습니다. 드디어 8번째 딸의 차례가 되어, 딸과 노부부는 슬픔에 젖어 있었습니다. 거기에 하늘 저 먼곳에서 신이 내려오셨습니다. 신은 노부부를 시켜 술을 만들어, 산 제물이 되려고 하는 딸 앞에 두게 하였습니다. 괴물은 천둥, 폭우와 함께 나타나 술에 비친 딸을 딸로 잘못 알고 그 술을 마시고는 곤드라집니다. 용기있는 신은 그 괴물을 퇴치하고, 구해낸 딸과 결혼해서 이즈모 나라에서 행복하게 사셨다는 이야기입니다.

실은 이 괴물은 서일본의 연봉 (聯峰) 과 그 연봉에서 범람하는 홍수를 가리킵니다. 또한 딸 이름을 구시이나다히메 (希槿田姬) 라 씁니다. 히메는 드물다는 뜻이 있으며 「드물게도 풍요롭게 열매를 맺은 벼 논 의 여인」이란 뜻입니다. 『야마타노 오로치 (八岐大蛇)』의 이야기는 논밭을 홍수로부터 지켜 농경국가 · 일본이 탄생하였다는 것을 전해주고 있습니다.



야마타노 오로치 (Sanno Kagura Group)



모미지가리 (Uegochi Kagura Group)

모미지가리 (紅葉狩, 단풍 놀이)

이 가구라의 줄거리는 높은 산등성이가 일본의 지붕을 연상하게 하는 신슈 (信州) 지방의 도가크시야마 (戸隠山) 산의 전설에 일본의 아름다운 가을 정경이 어우러져서 만들어진 것입니다.

지금으로부터 천 년 전, 도가크시야마 산에 살고 있는 귀신이 이웃 마을에서 악탈을 계속하고 있었습니다. 귀신의 악행은 수도까지 전해 졌습니다. 이때 나라의 평화를 지키는 장군, 다이랴노 고레모치 (平維茂) 가 수도에서 도가크시야마 산을 향해 귀신을 퇴치하러 갑니다. 고레모치가 도가크시야마 산을 오르니, 산에서 내려다 보는 단풍이 가을 석양을 받아서 마치 진홍색의 바다처럼 빛나고 있어, 잘못해서 별천지에 들어선 것 같은 감동을 받았습니다.

거기에 아름다운 여인이 나타나, 그 단풍 나무 밑의 주변으로 유혹합니다. 실은 이 여인이야말로 귀신의 화신이었던 것입니다. 고레모치는 이미 장군으로서의 임무도 있고, 여인이 귀신의 화신인 것도 모른 채, 여인이 술을 권하는대로 다 마셔 곤드레만드레 취합니다. 여인은 귀신으로 변해, 고레모치를 찢어 먹으려 합니다. 그때 고레모치가 평소부터 받들고 있는 신이 나타납니다. 신은 고레모치를 눈뜨게 하고, 고레모치는 신이 내린 정의의 검으로 귀신을 퇴치합니다.

다마모노마에 (玉藻前), 앓코덴 (惡狐傳), 셋쇼세키 (殺生石)

지금으로부터 1500년 전, 온갖 악행을 다하여 세상을 문란시키고 일본으로 날아온 여우가 있었습니다. 이 여우는 금모 구미 (金毛九尾) 의 여우라 하며, 온 몸이 금색으로 빛나는 아름다운 털로 덮혀 있었습니다. 또한 꼬리가 9개 붙어 있었습니다.

가구라는 3개의 이야기로 나뉘어져 있습니다.



앓코덴 (Miyasaki Kagura Group)

제1화는 『다마모노마에 (玉藻前)』라 합니다.

일본으로 건너온 이 여우는 절세의 미녀로 둔갑합니다. 그리고 다마모노마에 (玉藻前)란 이름으로 천황의 총애를 한몸에 받게 됩니다.

그러자 천황은 건강을 잃게 되고, 나라 정치가 어지러워집니다. 이를 수상하게 여긴 음양사 (陰陽師), 아베노 야스나리 (安倍泰成) 는 이 아름다운 여인이 여우의 화신임을 간파합니다. 여인은 여우 모습으로 되돌아가, 동쪽 하늘로 날아가 버립니다.

제2화는 『앓코덴 (惡狐傳)』이라 합니다.

다마모노마에 (玉藻前)는 음양사가 자기 정체를 꿰뚫어 본 것을 알자 수도에서 동쪽 하늘로 날아갑니다. 그리고는 수도에서 멀리 떨어진 동쪽 나라, 나스노가하라 (那須野ヶ原) 에 내려 앉았습니다. 또다시 아름다운 여인으로 변신하여 나스노가하라 마을 사람들을 방심시킨 후, 잇달아 죽이고 맙니다.

이 괴상한 여우의 악행을 들은 동쪽 나라 평화를 지키는 미우라노스케 (三浦之介) 와 가즈사노스케 (上總之介) 라는 궁도의 명인들은 기어이 이 여우를 화살을 쏘아 죽여 버립니다.

제3화는 『셋쇼세키 (殺生石, 살생 돌)』입니다.

화살을 맞아 죽은 여우의 정령은 나스노가하라에서 돌로 변합니다. 이 돌을 사람들은 살생 돌이라 부르기 시작합니다. 이 돌에 다가오는 사람이나 동물을 원인도 모르게 죽이는 무서운 돌이기 때문입니다. 이때 어느 고승이 영불을 외우면서 다가가 손에 쥔 큰 쇠망치로 쳤더니,그 돌은 깨어지고 나스노가하라는 평화를 되찾게 되었습니다.

가구라는 이상 3개의 이야기들이 독립된 연목으로 춤추어집니다.

또한 이 이야기가 만들어진 나스노가하라는 화산이 있었던 곳이며, 현재도 유황 냄새를 풍기고 있습니다. 그리고 살생 돌의 석비가 세워져 있습니다. 또한 살생 돌을 깬 고승의 이름을 겐노 (玄翁) 스님이라 하며, 그 이후로 돌을 깨기 위한 쇠망치를 「겐노」라고 부르게 되었다고 전해집니다.

모도리바시 (戻橋) · 라쇼몬 (羅生門) · 오에야마 (大江山) 의 배경

지금으로부터 1200년 전, 수도는 나라 (奈良) 에서 교토 (京都) 로 옮겨 졌습니다. 평화롭고 풍요로운 나라로 되기를 바라면서 헤이안시대 (平安時代 794~1185년경) 라 명명하였습니다.

수도 현관에는 호화로운 「라쇼몬 (羅生門)」이란 대문을 세웠으며, 수도 건물들은 아름답게 늘어서 있었습니다. 시대는 흘러 헤이안시대가 200년을 지날 무렵, 세상이 어지러워지면서 도적, 유괴 등 많은 범죄가 일어났습니다. 수도의 남쪽 현관 입구에 서 있었던 「라쇼몬」 대문은 무너지고 말았고, 수도 북쪽에 걸려진 「모도리바시 (戻橋)」 다리에는 밤이 되면 귀신이 출몰한다는 말이 뒷사람의 입에 오르내리게 되었습니다.

가구라의 이야기 내용은 세상을 문란시키는 「귀신들」과 수도의 평화를 지키려고 하는 「사람들」과의 싸움을 두고 창작한 것입니다. 귀신의 두목은 슈텐도지 (酒呑童子) 입니다. 수하로서 아바라기도지 (茨木童子), 가라쿠마도지 (唐熊童子) 를 데리고 있습니다. 수도를 지키는 무장은 미나모토노 라이코 (源頼光) 입니다. 라이코는 4명의 용감한 수행자들을 데리고 있으며, 이들을 시텐노 (四天王) 라 부릅니다.

이 이야기는 『모도리바시 (戻橋)』 『라쇼몬 (羅生門)』 『오에야마 (大江山)』의 순서로 이어지면서, 각각 독립된 연목으로서 춤추어집니다.

『모도리바시 (戻橋)』는 한쪽 팔이 베어진 귀신 이야기.

『라쇼몬 (羅生門)』은 귀신의 두목에 의해 한쪽 팔을 되찾아, 귀신의 팔이 제모습으로 돌아간 이야기.

『오에야마 (大江山)』는 라이코 (頼光) 와 시텐노 (四天王) 들이 오에야마 산의 귀신을 퇴치하는 이야기입니다.



모도리바시 (Sanno Kagura Group)



라쇼몬 (Otsuka Kagura Group)

모도리바시 (戻橋)

「저녁 무렵이 되면 『모도리바시』 부근에 귀신이 나타나 수도에 사는 사람들을 습격한다.」는 소리를 시텐노의 한 사람인 와타나베노 쓰나 (渡邊綱) 가 듣습니다. 쓰나는 귀신을 물리치기 위해 모도리바시 다리를 향합니다. 그곳에서 하늘을 날거나 여자로 화신할 수 있는 요술 (妖術) 을 구사하는 귀신을 만나게 됩니다. 쓰나와 귀신은 싸우게 되며, 쓰나는 귀신의 한쪽 팔을 베어냅니다. 귀신은 하늘 높이 날아 북쪽 산을 향해 달아납니다. 이것이 『모도리바시』의 줄거리입니다.

라쇼몬 (羅生門)

세상이 문란하게 되자, 아름답게 빛나던 라쇼몬 대문도 무너지면서 여기에 신신이 던져지거나, 대문에 귀신이 거처한다는 말이 퍼지기 시작하였습니다.

이 라쇼몬 대문 가까이에 쓰나의 저택이 자리잡고 있었습니다. 쓰나는 모도리바시 다리에서 베어낸 귀신의 한쪽 팔을 이 저택에 숨기고 있었습니다. 여기에 쓰나의 어린 시절 유모가 나타나 귀신의 한쪽 팔을 보고 싶다고 조릅니다. 쓰나는 보여주지 못한다고 하나, 결국 보여주고 맙니다. 이 유모는 쓰나의 친 유모를 먹어 죽이고, 유모로 화신한 슈텐도지 (酒呑童子) 였던 것입니다. 유모는 귀신의 한쪽 팔을 잡자 그 팔을 잃었던 귀신이 있는 곳으로 달려가, 팔을 붙여 줍니다. 이것이 『라쇼몬 (羅生門)』의 줄거리입니다.

오에야마 (大江山)

수도는 귀신들이 암약하는 「공포의 수도」로 변했습니다. 미나모토노 라이코 (源頼光) 는 점쟁이에게 「귀신의 소굴」을 묻습니다. 점쟁이는 「수도에서 저 멀리 북쪽 방향에 위치한 오에야마라는 산이다.」라고 답을 합니다.

라이코와 시텐노 (四天王) 들은 오에야마 산으로 귀신을 퇴치하러 갑니다. 그 도중에 신이 나타나, 라이코에게 술을 주었습니다. 이 술은 귀신이 마시면 독이 되고, 사람이 마시면 건강해지는 술이었습니다.

오에야마 산으로 당도하니, 눈물을 흘리면서 천을 찢고 있는 여인을 만납니다. 수도에서 납치된 여인이었습니다. 이 여인의 안내로 귀신의 굴로 들어갑니다. 슈텐도지는 이 일행들이 어떤자인지 의심을 품습니다. 라이코는 불도 수행을 위해 일본의 산을 걷고 있는 야마부시 (山伏) 중이라 대답하고 신에게서 받은 술을 선물합니다. 주연을 마치고 술에 만취한 귀신들을 상대로 라이코들은 격투를 벌여, 귀신을 퇴치하고, 수도로 개선했습니다. 이것이 『오에야마 (大江山)』의 줄거리입니다.



오에야마 (Harada Kagura Group)

广岛艺北的神乐

在远古时代，以文化与产业为中心而繁荣起来的出云地区，其用于农耕祭祀仪式或祭神仪式的神乐，也流传到了西之国的石见地区。

在石见地区，神乐又纳入古书记或日本书记中的神话及故事，进而形成了石见神乐独特的神乐文化。

于是，就在这里诞生了全国独一无二，将只表演给神明观赏的神乐，普及为连表演者、观众也能享受其中乐趣的石见神乐。

更在之后，石见神乐于江户时代（西元1603年～1867年）末期，传到了广岛县的艺北地区。到了明治时代（西元1868年～1912年），原本以神职人员为中心表演的神乐，经由各地氏神社的地方人士传承，逐渐演变为具有高度娱乐性的神乐表演。

二次大战后，（西元1945年后），日本古典艺术中的能以及歌舞伎剧中的故事、还有日本各地的传说，都加入了神乐的剧码中。

另一方面，在举行神乐竞演大会时，开始注重神乐演出者的身心与技巧，进而要求戏剧性以及艺术性兼备的神乐。

同时，更进一步地将传承至此的剧码，由不同的神乐剧团各自重新编写，完成和「能与歌舞伎」有着不同风格的舞台艺术。

广岛艺北地区的神乐，从农耕祭祀礼仪以来，到古代日本大和之国诞生的神话及故事、平安时代（西元794年～1185年左右）的传说、历史故事等等，总共有七十多齣戏流传下来，现在仍继续加入神乐剧团自创的剧码。

艺北地区约有一百多个神乐剧团持续着表演活动。神乐跨出了山间农村，成为年轻人的文化，孕育着身心健全的新世代。

构筑出古老却又创新的日本文化。

另外，在广岛县也并存着源流相异的「安艺十二神祇」、「比婆荒神神乐」、「备後神乐」等神乐。



公演结束后的情景

土蜘蛛

距今一千五百年前，日本的古代国家刚统一，以现在的奈良大和盆地为中心，爆发激烈的国家权力冲突。在这场战役中败北的人们，历尽千辛万苦逃往能够将大和地区一览无遗的葛城山深处，隐姓埋名、忍辱偷生地度日。世人称他们为土蜘蛛，过着被世间轻蔑的日子。

之后，都城从大和移往京都，经过了数百年。神乐的故事内容，就是「让土蜘蛛被践踏的历史昭雪，并且为了拥有自己统治的土地，而向守护都城和平的将军源赖光挑战」，这类故事。

土蜘蛛变成鬼怪，从大和朝着京都前进，正好在同时，赖光因疾病缠身。赖光遣侍女蝴蝶到医师那里买药，知情的土蜘蛛们，将买药归途中的蝴蝶给杀了，并将药调包成毒药企图让赖光喝下。

当赖光正要喝下药时，发现其中有异，于是操起名刀斩向由土蜘蛛变成的侍女蝴蝶，然而鬼怪带着伤，一路逃往栖身之处的葛城山。

之后，赖光的家臣们赶往葛城山追击土蜘蛛，并将其驱退。



土蜘蛛：大塚神乐团

泷夜叉公主：中川户神乐团

泷夜叉公主

距今千年前，都城位于日本西部的京都，名为平安时代（西元794年～1185年左右），人民过着和平的日子。但是日本东部地区，衍生出力量强大的武士集团，其首领名为平将门，宣称「东部要成立东之国，我要成为统治者」。简言之，就是「要建立属于自己的新国家」。

当时的朝廷极为震惊，派遣军队讨伐将门及其族人，日本历史上称之为「天庆之乱」。

神乐的故事，则是以将门女儿泷公主在这场战争中，一个人残存下来的传说创作而成。

泷公主为了替父亲将门报仇，进行严苛的修行学会了妖术，并且改名为泷夜叉公主，集结手下整队备战。得知此消息的西国，指派了妖术与公主不相上下的占卜师和军队进攻东之国，经过一场激战后，终于讨伐成功击败泷夜叉公主。

制作 北广岛地域观光事业特约协议会
监修：NPO法人广岛神乐艺术研究所

神乐

KAGURA JAPAN

广岛

HIROSHIMA

神乐的故事

KAGURA STORY

日本的神乐

神乐是一种对大自然的恩惠持以感谢之心，而演变成的农耕祭祀仪式。

远古时期，我们的老祖宗相信，这个世界上的所有事物都来自于神明的旨意。

在秋收之后，将各种各样的食物供奉在神圣的场所，逐渐发展成祭典的形式，以神乐这种祭祀仪式，表达对神明的感谢之意。

在那之后，神乐也融合了由中国所传过来的阴阳五行概念，吸收了阴阳道的论述。

阴阳道视东西南北的方位和春夏秋冬的四季更迭为大自然的循环，人们的日常生活和农耕的作息都和这自然变换的规则息息相关。

就这样，在原始而朴实的农耕祭祀仪式的神乐之外，加上了太阳信仰的祭神仪式，进而发展为祈求国泰民安、无病息灾等等的祈愿行事。

另一方面，由寻求安居之地而迁徙他乡的人们，在全国各地建造了祭祀出生地守护神的氏神社。此举让神乐也一起成为全国共通的事物。

神乐在各地藉由不同的文化风土茁壮，并由神职人员或当地居民们传承下来，在被称为传统艺术、乡土艺术等的日本民俗艺术里，继续存在于民众的生活之中。

另外，距今六百年前的室町时代（西元1336年～1573年），从神乐中发展出「能」，五百年前的战国时代（西元1467～1573左右）则衍生出「歌舞伎」，转化为举世闻名的日本传统艺术。



天岩户：原田神乐团



八岐大蛇：山王神乐团

八岐大蛇

这是日本的神话故事。

很早以前，在「出云之国」中住着一对老夫妇和八个女儿。某年夏天，一只身上长有八个头颅、八条尾巴的蛇形怪物，从深山中现形，吞食了其中一个女儿。

从此以后，每年的这个季节，大蛇都会出现并吞食一个女儿，终于轮到了第八个女儿的时刻。女孩和老夫妇都非常悲伤，就在此时，神明从空中降临，指示老夫妇酿造浓酒，放在即将成为蛇怪祭品的女孩身前。不久，蛇怪伴随着雷电和暴雨一起现身，看见映照在酒中的女孩形影，误以为就是本尊，于是将整壶酒喝得一滴不剩而烂醉。勇敢的神明，便趁机将怪物给制伏，并且与解救出来的女孩结婚，幸福地住在出云之国。

事实上，这个传说中的怪物，是指位于西日本的绵延山峰、以及从山中泛滥成灾的洪水。

另外，这位女孩的名字：希稻田姬，「希」是稀少的意思，因此这个名字含有「难能结穗累累稻田中的公主」之意。「八岐大蛇」的故事，表达的是守护田园对抗洪水的，从而诞生出稻米之国日本的意义。



八岐大蛇：山王神乐团



红叶狩猎：上河内神乐团

红叶狩猎

这个神乐的故事，是以拥有高山群峰而被视为日本屋脊的信州户隐山的传说，与日本秋色美景连结而成。

距今千年之前，户隐山中有鬼怪栖息，经常掠夺附近的村落。

鬼怪的恶行传到了都城，守护国家和平的将军平维茂得知此事，便从都城出发前往户隐山驱逐恶鬼。当维茂登上户隐山，在秋日照耀下绵延层层的红叶，如同燎原火海般闪耀着光芒，让他彷彿坠入另一个世界般感动。

此时，美丽的公主出现，引诱维茂参加摆设红叶树下的筵席。然而这位公主，其实就是鬼怪的化身。

维茂完全忘了自己身为一位将军之事，也不知道这位公主就是鬼怪的化身，将劝进的美酒一杯又一杯不停地豪饮，直到烂醉。公主趁机恢复成鬼怪之身，想将维茂撕裂吞食，就在此时，维茂平日虔诚供奉的神明现身，将维茂唤醒，并且授予他正义的神剑，将鬼怪顺利驱逐。

玉藻前、恶狐传、杀生石

距今约一千五百年前，有只无恶不作、扰乱世间，而后飞回到日本的妖狐。

这只妖狐被称为金毛九尾狐，有着全身闪烁金色光芒的美丽皮毛，以及九条尾巴



恶狐传：宫乃木神乐团

神乐的故事分为三集。

第一集是「玉藻前」

渡海到日本的妖狐，化身为绝世美女，并且以「玉藻前」这个名字，受到当时天皇的宠爱。不久，天皇的身体逐渐变得虚弱，国家的政治也开始衰败起来。阴阳师安倍泰成怀疑这一切背后另有其谋，识破了这位美丽的公主其实是妖狐的化身，于是公主现出原形，朝着东方的天空消失无踪。

第二集是「恶狐传」

玉藻前因为被阴阳师识破了本尊，从都城逃向东方的天空，降落在距离都城遥远的东方国那须野之原，再度化为美丽的公主，诱惑那须野之原的村人，然后一个个杀掉。擅使弓箭、守护东之国和平的三浦之介与上总之介二人，得知妖狐的恶行，于是用弓箭射杀了这只妖狐。

第三集是「杀生石」

被弓箭射杀的妖狐，魂魄在那须野之原化成了一颗石头，人们称之为「杀生石」。这颗杀生石，是一颗人或动物只要接近就会不明原因死亡的恐怖石头。这回有位高僧，一边念着佛号一边靠近，拿起手中的巨大铁鎚敲碎了杀生石。

顿时，妖狐的魂魄四处飞散，那须野之原终于恢复了和平。

神乐将这三个故事独立成不同的戏码演出。

另外，孕育出这个故事的那须野之原，其火山所在的位置，至今依然飘散着硫磺的味道，且竖立着杀生石的石碑。将杀生石敲碎的高僧名为玄翁，其后，敲碎石头的铁鎚，也被称为玄翁。

奈何桥、罗生门、大江山的故事背景

距今一千二百年前，首都由奈良迁移到京都。为了祈愿日本成为和平而丰饶的国家，而命名为平安时代（西元794年~1185年左右）。

作为都城的正门，建造了雄伟壮丽的「罗生门」，城内优美的建筑物鳞次栉比。

时光流转，就在平安时代过了二百年后，世间开始纷乱起来，盗窃、掠夺事件与日俱增，位于都城南边正门的「罗生门」也因战乱而崩毁。

另外，传闻到了夜晚，架设在都城北边的「奈何桥」上，便会有鬼怪의 入侵。

神乐的故事，便是以扰乱人世的「鬼众」，以及守护都城和平的「人众」之间的战斗所创作出来的。鬼怪的首领是吞酒童子，手下有茨木童子以及唐熊童子。

守护都城的武将，则是源赖光。这位武将赖光，有四位勇敢的随从，被称为四天王。

这个故事，便是以「奈何桥」、「罗生门」、「大江山」为延续，各自独立演出的剧码。

「奈何桥」是被斩断一只手臂的鬼怪故事。

「罗生门」是由鬼之首领取回断臂，并且让鬼怪的手臂恢复原状的故事。

「大江山」是赖光与四天王，到大江山驱逐鬼众的故事。



奈何桥：山王神乐团



罗生门：大塚神乐团

奈何桥

四天王之一的渡边纲，听说每到黄昏，「奈何桥」的附近就会有鬼怪出没。并且袭击都城的人民，便朝着奈何桥出发想要驱退鬼怪。却遇上了会使用「妖术」化身为女性，而且能够在空中飞舞的鬼。纲与鬼怪在一场激战中，砍断了鬼的一只手臂。鬼怪飞向高空，朝着北边的山上逃逸。

这就是「奈何桥」的故事。

罗生门

世间战乱连连，雄伟壮丽的罗生门也因此在这场大火中崩毁，谣传这里被弃置了许多的尸体，成为众鬼栖息的居所。

在这罗生门的附近，有纲的行馆。

纲把从奈何桥上斩断的鬼怪手臂，藏在行馆中。

就在那里，出现了纲幼时的奶娘，对着纲说她想看看鬼怪的手臂。虽然纲拒绝了她的要求，最后还是拗不过只好答应。然而眼前这个奶娘，就是噬杀了纲真正奶娘的吞鬼童子所化身而成。冒牌的奶娘于是迅速抓起了鬼的断臂，往失去手臂的鬼怪之处飞奔而逃，并帮鬼怪装回手臂。

这就是「罗生门」的故事。

大江山

京都变成了鬼怪出没的「恐怖之都」。源赖光询问占卜师「鬼怪的巢穴」在何处，占卜师回答：「位于北方，距离京都极为遥远之处的大江山」。于是赖光和四天王便出发前往大江山讨伐诸鬼，路上神明现身赐给赖光一壶酒。这壶酒鬼怪喝了会变成毒物，而人类喝了却会元气大增。

当赖光来到大江山之后，遇见一位从京都被鬼怪掳拐来的公主，正在一边流泪一边洗涤布料。在这位公主的引导下，赖光一行人进入了鬼之馆。守门的吞酒童子怀疑起他们的身份，赖光说明自己是在日本山中的修行僧，并且把神明赐予的酒送给吞酒童子。

酒宴之后，赖光一行人和醉酒的群鬼们经过一场激烈的战斗，终于驱逐了众鬼，顺利凯旋返回京都。

这就是「大江山」的故事。



大江山：原田神乐团

廣島藝北的神樂

在遠古時代，以文化與產業為中心而繁榮起來的出雲地區，其用於農耕祭祀儀式或祭神儀式的神樂，也流傳到了西之國的石見地區。

在石見地區，神樂又納入古書記或日本書紀中的神話及故事，進而形成了石見神樂獨特的神樂文化。

於是，就在這裡誕生了全國獨一無二，將只表演給神明觀賞的神樂，普及為連表演者、觀眾也能享受其中樂趣的石見神樂。

更在之後，石見神樂於江戶時代（西元1603年～1867年）末期，傳到了廣島縣的藝北地區。到了明治時代（西元1868年～1912年），原本以神職人員為中心表演的神樂，經由各地氏神社的地方人士傳承，逐漸演變為具有高度娛樂性的神樂表演。

二次大戰後，（西元1945年後），日本古典藝術中的能以及歌舞伎劇中的故事、還有日本各地的傳說，都加入了神樂的劇碼中。

另一方面，在舉辦神樂競演大會時，也開始注重神樂演出者的身心與技巧，進化為要求戲劇性以及藝術性兼備的神樂。

同時，更進一步的將傳承至此的劇碼，由不同的神樂劇團各自重新編寫，完成和「能與歌舞伎」有著不同風格的舞台藝術。

廣島藝北地區的神樂，從農耕祭祀禮儀以來，到古代日本大和之國誕生的神話及故事、平安時代（西元794年～1185年左右）的傳說、歷史故事等等，總共有七十多齣戲碼流傳下來，現在仍繼續加入神樂劇團自創的劇碼。

藝北地區約有一百多個神樂劇團持續著表演活動。神樂跨出了山間農村，成為年輕人的文化，孕育著身心健全的新世代。構築出古老卻又創新的日本文化。

另外，在廣島縣也並存著來源相異的「安藝十二神祇」、「比婆荒神神樂」、「備後神樂」等神樂。



公演結束後的情景

土蜘蛛

距今一千五百年前，日本的古代國家剛統一，以現今的奈良大和盆地為中心，爆發激烈的國家權力衝突。在這場戰役中敗北的人們，歷盡千辛萬苦逃往能夠將大和地區一覽無遺的葛城山深處，隱姓埋名、忍辱偷生地度日。世人稱他們為土蜘蛛，過著被世間輕蔑的日子。

之後，都城從大和移往京都，經過了數百年。神樂的故事內容，就是「讓土蜘蛛被踐踏的歷史昭雪，並且為了擁有自己統治的土地，而向守護都城和平的將軍源賴光挑戰」，這類的故事。

土蜘蛛變成鬼怪，從大和朝著京都前進，正好在同時，賴光因疾病纏身。賴光遣侍女蝴蝶到醫師那裡買藥，得知這消息的土蜘蛛們，將買藥歸途中的蝴蝶給殺了，並將藥調包成毒藥企圖讓賴光喝下。

當賴光正要喝下藥時，發現其中有異，於是操起名刀斬向由土蜘蛛變成的侍女蝴蝶，然而鬼怪帶著傷，一路逃往棲身之處的葛城山。

之後，賴光的家臣們趕往葛城山追擊土蜘蛛，並將其驅退。



土蜘蛛：大塚神樂團

瀧夜叉公主：中川戶神樂團

瀧夜叉公主

距今千年前，都城位於日本西部的京都，名為平安時代（西元794年～1185年左右），人民過著和平的日子。但是日本東部地區，衍生出勢力強大的武士集團，其首領平將門，宣稱「在東部成立東之國，我要成為統治者」。簡言之，就是「要建立屬於自己的新國家」。簡言之，就是「要建立屬於自己的新國家」。

當時的朝廷極為震驚，派遣軍隊討伐將門及其族人，日本歷史上稱之為「天慶之亂」。

神樂的故事，則是以將門的女兒瀧公主在這場戰爭中，一個人殘存下來的傳說創作而成。

瀧公主為了替父親將門報仇，進行嚴苛的修行學會了妖術，並且改名為瀧夜叉公主，集結手下整隊備戰。得知此消息的西之國，指派了妖術與公主不相上下的占卜師和軍隊進攻東之國，經過一場激戰後，終於討伐成功擊敗瀧夜叉公主。

製作 北廣島地域觀光事業特約協議會
監修：NPO法人廣島神樂藝術研究所

神樂

KAGURA JAPAN

廣島

HIROSHIMA

神樂的故事

KAGURA STORY

日本的神樂

神樂是一種對大自然的恩惠懷抱感謝之心，而演變成的農耕祭祀儀式。

遠古時期，我們的老祖先相信，這個世界上的所有事物都來自於神明的旨意。

在秋收之後，將各種各類的食物供奉在神聖的場所，逐漸發展成祭典的形式，以神樂這種祭祀儀式，表達對神明的感謝之意。

在那之後，神樂也融合了由中國所傳過來的陰陽五行概念，吸收了陰陽道的論述。

陰陽道視東西南北的方位和春夏秋冬的四季更迭為大自然的循環，人們的日常生活和農耕的作息都和這自然變換的規則息息相關。

就這樣，在原始而樸實的農耕祭祀儀式的神樂之外，加上了太陽信仰的祭神儀式，進而發展為祈求國泰民安、無病息災等等的祈願行事。

另一方面，由尋求安居之地而遷徙他鄉的人們，在全國各地建造了祭祀出生地守護神的氏神社。此舉讓神樂也一起成為全國共通的事物。

神樂在各地藉由不同的文化風土茁壯，並由神職人員或當地居民們傳承下來，在傳統藝術、鄉土藝術等的日本民俗藝能裡，繼續存在於民眾的生活之中。

另外，距今六百年前的室町時代（西元1336年～1573年），從神樂中發展出「能」，五百年前的戰國時代（西元1467～1573左右）則衍生出「歌舞伎」，轉化為舉世聞名的日本傳統藝術。



天岩戶：原田神樂團



八岐大蛇：山王神樂團

八岐大蛇

這是日本的神話故事。

古早以前，在「出雲之國」中住著一對老夫婦和八個女兒。某年夏天，一隻身上長有八顆頭顱、八條尾巴的蛇形怪物，從深山中現形，吞食了其中一個女兒。

從此以後，每年的這個季節，大蛇都會出現並吞食一個女兒，終於輪到了第八個女兒的時刻。女孩和老夫婦都非常悲傷，就在此時，神明從空中降臨，指示老夫婦釀造濃酒，放在即將成為蛇怪祭品的女孩身前。不久，蛇怪伴隨著雷電和暴雨一起現身，看見映照在酒中的女孩形影，誤以為就是本尊，於是將整壺酒喝得一滴不剩而爛醉。勇敢的神明，便趁機將怪物給制伏，並且與解救出來的女孩結婚，幸福地住在出雲之國。

事實上，這個傳說中的怪物，是指位於西日本的綿延山峰、以及從山中泛濫成災的洪水。

另外，這位女孩的名字：希稻田姬，「希」是稀少的意思，因此這個名字含有「難能結穗累累稻田中的公主」之意。「八岐大蛇」的故事，表達的是守護田園對抗洪水，從而誕生出稻米之國日本的意義。



八岐大蛇：山王神樂團



紅葉狩獵：上河內神樂團

紅葉狩獵

這個神樂的故事，是以擁有高山群峰而被視為日本屋脊的信州戶隱山的傳說，與日本秋色美景連結而成。

距今千年之前，戶隱山中有鬼怪棲息，經常掠奪附近的村落。

鬼怪的惡行傳到了都城，守護國家和平的將軍平維茂得知此事，便從都城出發前往戶隱山驅逐惡鬼。當維茂登上戶隱山，在秋陽照耀下綿延層層的紅葉，如同燎原火海般閃耀著光芒，讓他彷彿墜入另一個世界般感動。

此時，美麗的公主出現，引誘維茂參加設在紅葉樹下的筵席。然而這位公主，其實就是鬼怪的化身。

維茂完全忘了自己身為一位將軍之事，也不知道這位公主就是鬼怪的化身，將勸進的美酒一杯又一杯不停地豪飲，直到爛醉。公主趁機恢復成鬼怪之身，想將維茂撕裂吞食，就在此時，維茂平日虔誠祀奉的神明現身，將維茂喚醒，並且授予他正義的神劍，將鬼怪順利驅退。

玉藻前、惡狐傳、殺生石

距今約一千五百年前，有隻無惡不作、擾亂世間，而後飛到日本的妖狐。

這隻妖狐被稱為金毛九尾狐，有著全身的閃耀金色光芒的美麗皮毛，以及九條尾巴。



惡狐傳：宮乃木神樂

神樂的故事分為三集。

第一集是「玉藻前」

渡海到日本的妖狐，化身為絕世美女，並且以「玉藻前」這個名字，受到當時天皇的寵愛。不久，天皇的身體逐漸變得虛弱，國家的政治也開始衰敗起來。陰陽師安倍泰成懷疑這一切背後另有其謀，識破了這位美麗的公主其實是妖狐的化身，公主於是現出原形，朝著東方的天空消逝無蹤。

第二集是「惡狐傳」

玉藻前因為被陰陽師識破了本尊，從都城逃向東方的天空，降落在距離都城遙遠的東之國那須野之原，再度化為美麗的公主，誘惑那須野之原的村人，然後一個個殺掉。擅使弓箭、守護東之國和平的三浦之介與上總之介二人，得知妖狐的惡行，於是用弓箭射殺了這隻妖狐。

第三集是「殺生石」

被弓箭射殺的妖狐，魂魄在那須野之原化成了一顆石頭，人們稱之為「殺生石」。這顆殺生石，是一顆人或動物只要接近就會不明原因死亡的恐怖石頭。這回有位高僧，一邊念著佛號一邊靠近，拿起手中的巨大鐵鎚敲碎了殺生石。

頓時，妖狐的魂魄四處飛散，那須野之原終於恢復了和平。

神樂將這三個故事獨立成不同的戲碼演出。

另外，孕育出這個故事的那須野之原，其火山所在的位置，至今依然飄散著硫磺的味道，且豎立有殺生石的石碑。將殺生石敲碎的高僧名為玄翁，其後，敲碎石頭的鐵鎚，也被稱為玄翁。

奈何橋、羅生門、大江山的背景

距今一千二百年前，首都由奈良遷移到京都。為了祈願日本成為和平而豐饒的國家，而命名為平安時代（西元794年~1185年左右）。

作為都城的玄關，建造了雄偉壯麗的「羅生門」，城內優美的建築物鱗次櫛比。

時光流轉，就在平安時代過了二百年後，世間開始紛亂起來，竊盜、擄掠事件與日俱增，位於都城南邊正門玄關的「羅生門」也因戰亂而崩毀。

另外，傳聞到了夜晚，架設在都城北邊的「奈何橋」上，便會有鬼怪的入侵。

神樂的故事，便是以擾亂人世的「鬼眾」，以及守護都城和平的「人眾」之間的戰鬥所創作出來的。鬼怪的首領是吞酒童子，手下有茨木童子以及唐熊童子。

守護都城的武將，則是源賴光。這位武將賴光，有四位勇敢的隨從，被稱為四天王。

這個故事，便是以「奈何橋」、「羅生門」、「大江山」為延續，各自獨立演出的劇碼。

「奈何橋」是被斬斷一隻手臂的鬼怪故事。

「羅生門」是由鬼之首領取回斷臂，並且讓鬼怪的手臂恢復原狀的故事。

「大江山」是賴光與四天王，到大江山驅逐鬼眾的故事。



奈何橋：山王神樂團



羅生門：大塚神樂團

奈何橋

四天王之一的渡邊綱，聽說每到黃昏，「奈何橋」的附近就會有鬼怪出沒。並且襲擊都城的人民，便朝著奈何橋出發想要驅退鬼怪。卻遇上了會使用「妖術」化身為女性，而且能夠在空中飛舞的鬼。綱與鬼怪在一場激戰中，砍斷了鬼的一隻手臂。鬼怪飛向高空，朝著北邊的山上逃逸。

這就是「奈何橋」的故事。

羅生門

世間戰亂連連，雄偉壯麗的羅生門也因此烽火中崩毀，謠傳這裡被棄置了許多的屍體，成為眾鬼棲息的居所。

在這羅生門的附近，有綱的行館。

綱把從奈何橋上斬斷的鬼怪手臂，藏在行館中。

就在那裡，出現了綱幼時的奶娘，對著綱說她想看看鬼怪的手臂。雖然綱拒絕了她的要求，最後還是拗不過只好答應。然而眼前這個奶娘，就是噬殺了綱真正奶娘的吞鬼童子所化身而成。冒牌的奶娘於是迅速抓起了鬼的斷臂，往失去手臂的鬼怪之處飛奔而逃，並幫鬼怪裝回手臂。

這就是「羅生門」的故事。

大江山

京都變成了鬼怪出沒的「恐怖之都」。源賴光詢問占卜師「鬼怪的巢穴」在何處，占卜師回答：「位於北方，距離京都極為遙遠之處的大江山」。於是賴光和四天王便出發前往大江山討伐諸鬼，路上神明現身賜給賴光一壺酒。這壺酒鬼怪喝了會變成毒物，而人類喝了卻會元氣大增。

當賴光來到大江山之後，遇見一位從京都被鬼怪擄拐來的公主，正在一邊流淚一邊洗滌布料。在這位公主的引導下，賴光一行人進入了鬼之館。守門的吞酒童子懷疑起他們的身分，賴光說明自己是在日本山中的修行僧，並且把神明賜予的酒送給吞酒童子。

酒宴之後，賴光一行人和醉酒的群鬼們經過一場激烈的戰鬥，終於驅退了眾鬼，順利凱旋返回京都。

這就是「大江山」的故事。



大江山：原田神樂團